

EASTICA テーマ報告 アーカイブズは貌となりうるか

国立公文書館 大濱 徹也

私は、記憶の宮殿ともいべきアーカイブズについての思いをめぐらすとき、子どもの頃に読み聞かされた『ニルスの不思議な旅』（1906-07年）を想起します。この物語は、20世紀初頭のスウェーデンがロシア帝国の脅威にさらされるなかで、農業国から工業国に展開していく過程で失われた記憶を取り戻すべく、スウェーデンの国民に自らが生きている場を確認させ、記憶を想起させるべく書かれた作品だと言われています。作者セルマ・ラーゲルレーヴは、政府の要請を受けて、スウェーデンの歴史、地理、文化がもつ多様な営みを国民各層のための物語として創作しました。教会や学校が嫌いで動物をいじめて楽しむいたずらっ子ニルスは、罰として妖精から魔法をかけられて親指ほどの小人にされ、渡り鳥の雁の群れと共にスウェーデン各地を旅するなかで、精神の豊かさを身につけて成長したときに魔法がとけてもとの人間にもどります。

このニルスの旅物語は、地域のさまざまな暮らしを知り、人間として成長する姿をとおり、スウェーデン国民に国民たる記憶を取り戻させたのです。物語がスウェーデン国民に説き明かした世界は、20世紀の神話にほかなりませんが、国民が記憶を共有する時、初めて国家が新たに蘇生しうることを示唆しています。この営みは、かつて倭が日本となり、国家の自立をめざしたヤマトの王権が、『古事記』『風土記』という物語に託した思いに通じるものです。

ここには、国家を国家たらしめるものとして、その構成員がある記憶を共有しうるか否かが問われていることがうかがえます。このことはコミュニティーの記憶が協同体の精神として意識され、継承されていく形で国民の記憶に組み込まれたとき、一つの国家の物語が作られていくことを教示しております。まさにアーカイブズは、この記憶を呼び戻し、生み育てる記録の倉庫であり、知

の宝庫として、国家や民族の歴史を蘇生せしめる器として存在してきました。現在、そのアーカイブズが存在の根拠を問われ、大きな岐路にたたされているのではないのでしょうか。

2

昔時、アーカイブズは王や教会寺院の権威の象徴であり、その権力を保証する記録の保管庫でした。王や聖職者は、アーカイブズに蓄積された知の遺産を独占することで、権力を確保しつづけたのです。

市民革命は、この王や聖職者・官僚に独占された知を市民・国民に解放することで、国民国家への新しい地平を切り拓きました。アーカイブズは、国民の権利を保障する器と意識され、国家やコミュニティーの営みを遺し、継承するなかに国民たる記憶を共有することを可能にします。そのためアーカイブズは愛国心を国民一人ひとりが確かめる場でもありました。

いわばアーカイブズのあり方は政治文化の成熟度を示す物指しともなります。まさに国民が過去の記録を如何に保管しているか否か、その保護にはらう態度はその国民の文明度をはかる尺度にはかなりません。

この知の宝庫たるアーカイブズは、広く国民に開かれているとはいうものの、知識人、学者といわれる新しい聖職者が知を独占していく場に変質しがちです。こうした知をめぐる情報の独占傾向は、アーカイブズは何人にも開かれているのだという理念に逆行するため、時と共に厳しい批判にさらされました。この批判こそは、利用者が一国民、一市民としての名前を名乗る有名性によって、アーカイブズの公開性を高めていく推進力となってきました。

しかし現代社会を襲う情報革命は、何人へもアクセスを保障したアーカイブズの門戸開放が、インターネットと大容量の情報蓄積を可能とするIC技術の進歩にうながされ、己の名前を秘匿した匿名による利用を可能となし、多様な個人情報等の流出が市民社会の存立を危機にさらすような事態を招いています。そのためアーカイブズは、何人にもアクセス権を保障することで成立してきましたが、今や国家社会が産み育てた知を継承する記録の保管庫として、アクセスの拒否を求める声にも対応しながら記憶の宮殿たる営みを保つしかない

状況に追い込まれようとしています。

この状況こそは、アーカイブズの存在に疑念を抱かせ、予算削減等の追い討ちがかけられるなかで、アーカイブズの明日をいかに切り拓くかという課題を提示せしめたものにはかなりません。いかにすれば、アーカイブズは国民、市民が私を確認し、記憶を想起し、共有する器として新たな場を確立しうるのでしょうか。

3

アーカイブズは、新しい聖職者に目を向けるのではなく、その器を支えるクライアントたる国民、市民にいかなる貌を向ければよいのでしょうか。そのためにもアーカイブズに託された責務、国民、市民の権利を保障する器として如何なる歩みをせねばならないかを確認せねばなりません。その歩みは、強大化する国家の暴走を点検し、権力の恣意的運用を糾し、国民、市民が開かれた社会を築くための民主主義の砦をめざします。

開かれた社会を可能とする情報公開は、アカウントビリティーと一対となることで、はじめて意味をもちます。証明責任を果たすには求められた問いに的確に応答せねばなりません。まさにアーカイブズは、政府の営みを検証する作業を保障し、明日のあるべき姿を提示しうる器として、未来に向けて開かれた目を鍛える場でもあります。それだけにアーカイブズの守護者たるアーキビストには、干からびた黴におおわれた歴史にのみ目を注ぐのではなく、明日の歴史を切り拓く目が求められています。

今やアーカイブズは、過去の考証にのみとらわれた歴史研究者、歴史好きの好事家だけを第一のクライアントに位置づけているようでは、その転落への第一歩が始まるのだと言い得るのではないのでしょうか。それだけにアーカイブズには、明日の歴史を視野に入れつつ、現実政治の場で行政の効率的運用を高め、企業の経営管理、学校教育の場等でそれぞれの課題に向けた政略をふまえた戦略を構築するために、いかに脱皮しうるかが問われています。

アーカイブズはいま何をなすべきなのでしょうか。

アーカイブズが負わされた第一の使命は、国家、コミュニティー、企業、学

校等、アーカイブズの存立母体となっている諸組織の記録を体系的に遺し、組織の円滑かつ適切なる運営と継続性を保障することです。この使命は、昨今広く顕在化した記録の電子化が進展していくなかで、記録そのものを遺さない、残らない、いわば記録の匿名化ともいうべき状況に脅かされています。アーカイブズは、遺された記録を選別保管していく以前に、記録の匿名化と無化に対処せねばなりません。そのためには、記録の作成段階から記録管理に何らかのかたちで対応し、電子化された情報を有効に管理しうるか否かがアーカイブズの存在を左右します。もはや「歴史文化的価値」云々を建前とした評価選別作業を第一義とするアーキビストの使命は古典的なものとみなされるのではないのでしょうか。

IC技術が日ごとに進歩していく状況下では、評価選別という作業よりも、蓄積された情報をいかに生きたものとして遺していくかという、まさに情報社会の展開に即応しうる対策が求められています。かくてアーカイブズを担う専門職に求められる専門性には、歴史学、政治学等以上に、情報処理をはじめ数学や電子工学等の知識が大きな比重を占めてきましょう。

4

第二は、こうした情報革命がもたらした状況が如何に過酷であろうとも、アーカイブズが負わされた古典的使命、アーカイブズが担うべき原初的な役割を常に想起していかねばなりません。アーカイブズは、如何なる状況になろうとも、記憶の宮殿として、コミュニティーの記憶、国家、民族のなかで無化された記憶を蘇生し、共有する場を用意する責務を負わされています。この責務をはたすには、コミュニティーの一員たるクライアントをして、コミュニティーは私に何をしてくれたのか、私はコミュニティーに何をなしうるかという問いかけを、アーカイブズが受け止めねばなりません。この問いかけこそは、それぞれのコミュニティーにおいて、私にとり国家とは何か、民族とは何かを想起せしめる私の目をもつことを可能にしましょう。

しかし情報の独占は、多元的価値を否定し、世界の一元化を志向せしめます。こうした価値観の一元化は、失われた記憶の回復をアーカイブズに過剰なまで

期待し、国家や民族をめぐる物語が奏で出す過激なロマンを育みます。そのロマンは、誤った方向に導かれると、他者を否定し、民族浄化を促すエネルギーを噴出せしめ、他者が拠り所とする記憶の宮殿を破壊する熱狂に駆り立てたものになりかねません。

それだけに正しい意味でアーカイブズを守護することは、それぞれが生きるかけがえのないコミュニティの場から多様な記憶を想起し、共有していく営みを保障し、国家、民族のあるべき明日を手にするべく、開かれた社会、開かれた国家や民族を希求する方途なのです。いわば多様な価値観を包含する器として存在してこそ、アーカイブズは輝くことが出来るのです。

第三は、アーカイブズが記憶を蘇生せしめる知の遺産を継承する器であり続けることで、多様な情報資源の保管庫たる責務を負っていることです。この責務は、社会の知を担う器である図書館、博物館、歴史館等との連携を深め、その輪の結節点となることをアーカイブズに託しています。

記憶の蘇生は、これらの器が継承してきた多様な記録資料から知の遺産を読み取り、一人の人間たる私の心が共鳴共感する時、はじめて可能になります。アーカイブズは、記憶の宮殿をささえる記録の倉庫に眠る多様な素材を提示し、国民をして共感共鳴しうる世界に誘う器として、クライアントの心を魅惑するのではないのでしょうか。それだけに価値観の多様性への目を開かせる場であるアーカイブズが負わされている責務は大きいのです。

かくてアーカイブズの公開は、国家や民族の呪縛にとらわれた目を解き放ち、記録をふまえた対話、歴史対話を可能となし、相互が差異を認識することを可能とします。この認識こそは、コミュニティ間の亀裂を埋め、国家間、民族間の対話を実現せしめ、不毛な歴史戦争を終わらせうるのではないのでしょうか。

まさにアーカイブズは、記録が生み出す記憶の宮殿として、コミュニティからネーションにいたる回路を用意し、人びとが共有しうる記憶を確認する作業をふまえ、コミュニティの貌、ネーションの貌を提示することを可能とします。しかし貌の造形には、情報革命が進行し続ける現在、もはやアーカイブズのみで可能となるのではなく、情報資源の保管庫である図書館、博物館、歴史館等との情報交換をなし、それぞれが継承してきた世界を相互に理解し、そ

の知を共有する営みを積み重ねることが求められています。

この連携作業は、アーカイブズのクライアントが求める多様な知の要求に対応すべく、学校教育、社会教育、生涯教育等に参画し、各種の事業を営むことを可能とします。なかでも、デジタルアーカイブの活用は、教育の場において、特に僻地－遠隔地教育に活用されたとき子どもが時代、社会を読み取る目を身につけ、コミュニティーの良き担い手となる道を開いてくれましょう。

この試みは、情報社会のなかで無名化された私を回復し、私とコミュニティー、私とネーションの関係を問い質す目を養いましょう。この営みこそは、記憶を共有することで、コミュニティーやネーションの構成員の一体性を築き、開かれた社会の形成に向かう確かなる第一歩となるものです。

5

現在まさに情報革命が展開するなかでアーカイブズに求められているのは、日々刻々と生み出されている諸記録、とくに電子化された記録にアーキビストがいかにかかわり、電子情報によって匿名化され、消却されていく諸記録をいかに守り、遺し、保存していくかということです。この作業は、一人ひとりの記憶を無化することがもたらすアノミーな状況に対処し、記録をふまえた記憶の蘇生と共有によって、人間たる私の回復をはかる営みでもあります。

アーカイブズは、このような人間回復の場になりうるのみならず、諸組織の記録、多様な価値を秘めた記録を遺していくことで、記憶の宮殿となり、コミュニティーやネーションの明日を創造していくための器なのです。国民は、アーカイブズが保管している記録から過去の出来事や事実から想起しうる世界を己の目で解釈し、再編成することである記憶を手に入れ、私の場を確認し、自らが求める世界を目指し、コミュニティーやネーションに働きかけていきます。

アーカイブズに出会うことで、一人ひとりの国民が、市民が自己の権利のみを主張するのではなく、各人が等しくコミュニティーの一員たる義務と責務を負わされていることを認識します。この認識こそは、コミュニティーは私に何をしてくれたのかを問う目にうながされ、私はコミュニティーに何をなしうるかとの思いをめぐらすことを可能とします。この働きかけこそは、アーカイブ

ズを場として、社会を豊かになし、開かれた社会を確かなものとするのではないのでしょうか。

6

まさにアーカイブズは、ニルスの旅がスウェーデンの工業化がもたらした記憶の喪失を回復し、新たな国民統合に向けた記憶への目を育てたように、情報革命の進展によって無名化され、アノミーな状況下に放置された大衆が国民、市民たる私を確かめるために、遺された記録をもとに記憶を想起せしめる宮殿です。この宮殿が営む作業は、

- (1) 現代の記録庫たりうる道を確認なものとすることで、国家の営みを検証するなかに開かれた社会をめざし、
- (2) 遠隔地教育の新しい可能性をふまえた教育への目を具体化し、学校教育と結びついたアーカイブ像を構築し、
- (3) 諸国家、諸国民と記録をふまえた対話の場を用意し、それぞれの記憶の根にある世界を相互に理解していく方策を用意し、
- (4) この相互理解を深めるためにも、コミュニティーそしてネーションをめぐる記憶を共有しうるように、多様な記録にもとづいたネーション像を問いかけうる展示をなし、ネーションやコミュニティーの貌に思いを馳せる場としての存在を高めていき、豊かな明日をめざす足場を築いていくことです。

人びとは、この記憶の宮殿に踏み込み、記録が語りかける記憶を呼び起こす時、はじめて私であることを、社会の一員である私を知り、その存在を確認しうるのです。そのような私を蘇生し認知せしめる場がアーカイブズなのです。それだからこそアーカイブズは、多様な情報資源の発信基地としての存在を高め、国民、市民を輝かせる器ともなりうるのだといえましょう。

この器は、記憶の宮殿が問いかけてくる世界を造形することで、ネーションの貌、コミュニティーの貌を提示します。まさにアーカイブズは、その存立をなさしめている組織の貌となることで、組織を活性化せしめる魅惑的磁場なのです。

磁場が磁場としての力を発揮するには、アーカイブズのなかに、クライアントの力を吸収するための装置が必要です。この装置は、ともすれば自閉的になりがちなアーカイブズをして、社会に広く開かれた組織にしていくための先導的役割をも果たします。かくてアーカイブズは、クライアントたる国民，市民の声を背にした運営により、情報革命に幻惑されることなく、記録管理の府たる場を確保し、コミュニティや国家の営みを遺し、伝える使命を遂行できるのです。

